

2019年秋季特別展

## ふくいの鎮守さま—神と真宗道場が織りなす信仰世界—

<sup>いにしへ</sup>古から人は、人間の思慮・力の及ばざるものに「カミ」のすがたを感じて来ました。時に畏れを抱きながら祭りを通じて身近にカミと接し、日々を送ってきたようです。日本でも、古くは縄文時代から土偶に代表されるように祭りの痕跡を見ることができます。このような素朴なカミへの信仰に対し、農耕を生活基盤として複数の個人、家族が集結して定住し、ムラ、クニを形成してゆく弥生時代から古墳時代には、ムラを形成する一団(一族)共通の先祖としてのカミが意識され、ムラの団結の象徴ともいうべき存在となりました。やがて、大王を中心とした大和朝廷は、先進国中国(随・唐)の律令制度を取り入れ、天皇による中央集権国家を形成してゆきます。カミの世界も現実世界と同様に天皇の祖霊神を頂点として、神の序列がなされて「神道」が成立します。本展覧会は、ここからはじまります。

### 1. 「神道」の誕生

～律令制国家と仏教伝来と～

今日我々が「神道」と称する宗教の誕生は、狭義には飛鳥～奈良時代に遡ります。そして神道を成立させたのは天皇を頂点とした中央集権国家の成立と、仏教を中心とした外来宗教の公的導入です。

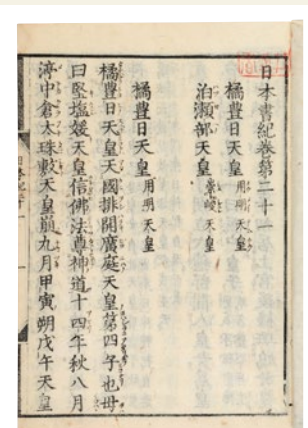
まず、天皇を中心とした古代国家形成の過程で朝廷の公式な歴史書といえる『古事記』や『日本書紀』が編纂されました。中国において歴代王朝がその正当性を示すため歴史書を編纂するのと同様の重要な事業であり、今日でも古代史を語る上で『古事記』、『日本書紀』は大きな位置を占めています。しかしこれらは歴史書でありながら神々の系譜から始まり、最高神である天照皇大神から地上世界の統治を任された天孫が地上に下り、在地の神(大国主)から国を譲られるという神話が大きなウエイトを占め、そこから、歴代天皇へと繋がる点が特色です。中国皇帝が天(神)から統治を委託された存在であるのに対し、ここでは天皇自身が

神であるとされ、この点が、天皇が貴族や豪族を含む万民と彼らが祀る神を含む一切の頂点に立つことの根拠とされました。『万葉集』にも「大君は神にしませば」で始まる一連の和歌があり、天皇=神とする当時の考えを知ることができます。

一方、天皇中心の国家システム形成期に仏教が朝廷での公式宗教と認められたことも重要です。仏教は「苦を脱する」ことを根本命題とした明確な哲学を持ち、解決に至る修行法も確立されています。それらが「経・律・論」により成文化され、「僧侶」と呼ばれるプロによって正しく教えられ、さらに信仰対象である「ほとけ(仏像)」により具体的な姿を目の当たりにしました。このような特色により現人神たる天皇をはじめ多くの人々の信仰を獲得しました。外国の神(蕃神)として仏教を公式に迎えた一方、日本の神々と明確に区分する上で『日本書紀』の「用明紀」・「孝徳紀」に「神道」の言葉が登場します(写真1)。こうして政治機構の一部として神祇官に属する日本古来の神々と、強力な力が期待され大寺を次々に寄進された仏教は、ともに天皇と国家の守護(鎮護国家)を担いました。

また、仏教では神も人間同様に「苦」を抱える救いの対象という思想から神への積極的アプローチが行われました。その結果、神宮寺の建立や神前での読経が行われ、さらに神が悟りを求めて修行し(大)菩薩号を得ることになりました。

この章では、朝廷側から『日本書紀』や延喜式等の写本、仏教との関わりから神社に奉納された經典や泰澄像とされる僧形の神像(泰澄寺蔵 福井県指定文化財)により「神道」確立の過程をみてゆきます。

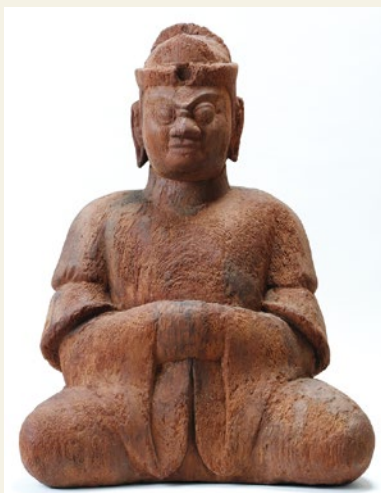


(写真1)『日本書紀』用明紀部分 福井県立歴史博物館

## 2. 神像を読む～神像の登場とその表現～

仏教が神道に与えた最たる影響は神のおすがた＝神像を登場させたことではないでしょうか？神道では神は実体を持たず、また見ることも許されない、「感じる」存在でした。今日でも拝見を許されない神のおすがたが神像として具現化されたのは早くも奈良時代末期頃といわれ、平安時代初期には優れた神像が数多く作られました。これらには仏教(仏像)の影響とともに、神道の独自表現も多く見られます。例えば眉間に皺を寄せた厳しい表情や目を見開いた怒りの表情は神本来の「畏れ多い」おすがたを表す、あるいは衣冠束帯という平安貴族の正装は朝廷を守護する官人であることを示す等、神道は神像という表現を得たことにより、より多くの情報を伝える

ことになりました。この章では、福井県でも古い神像として知られる男神坐像(福井県指定文化財 写真2)をはじめ多くの神像を蔵する坂井市大湊神社の神像群を例に、そのおすがたを読み解いてゆきます。



(写真2)福井県指定文化財 男神坐像 坂井市三国町安島大湊神社

## 3. 神社神道の躍進

### ～個別事例に見る鎮守さまの中・近世～

ももとは、それぞれの地域やムラの祖先ともいうべきカミが、朝廷と国土を守る鎮護国家の末端に組み込まれ、やがて古代国家の衰退に際し自立する地域の守り神となりました。一方、朝廷や有力貴族と関係の深い有力神社も古代国家の衰退に対して生き残りを賭け、本来は特定の場所に縛られたはずの神々が積極的に地域の神社に勧請され、全国各地へ出て行きました。そして有名神社の名を冠して装いも新たに鎮守さまとして村とともに歩み始めました。ここでは各神社に伝わる神像をはじめとした文化財から中近世における村の鎮守さまの展開についてたどります。

#### ケース1:村と流域を守る伝統の神 —3つの樺八幡神社—

福井市旧美山町の上味見川流域には延喜式に記載された式内社である樺神社が3社存在しています。それぞれ集落の鎮守さまとして、平安～鎌倉時代以降の文化財を有しています。ここでは特に多くの文化財を蔵

する中手町と東河原町の八幡神社(写真3)から神の「守り」について見てゆきます。



(写真3)男・女神坐像 福井市東河原町八幡神社

#### ケース2:摂社と末社—越前町八坂神社—

疫病の難を避けるため牛頭天王は各地で盛んに勧請されました。越前町天王の八坂神社も平安後期の牛頭天王像を祀ることから古くからの信仰を知ることができます。今回は本殿周りや境内に散在する摂社・末社にスポットをあて、小さな社の小さなご神像をご覧頂き、神社境内の空間について考えてみたいと思います。

#### ケース3:鎮守になったほとけさま

地域を守る鎮守さまといえば神社＝神と思われがちですが、「ほとけ」も神同様に鎮守さまとなります。ここではあわら市東山神明神社の阿弥陀如来坐像から鎮守のほとけについて考えてみたいと思います。

#### ケース4:お神明さん —天皇家の神社の地方展開—

天皇家の神社として、また神仏習合と距離を置いたことで知られる伊勢神宮は、中世以降は庶民にも開かれた神社として積極的に地方で勧請されました。現在の福井市街地の基礎となり、今日でも「お神明さん」と親しまれる神明神社を例に、「お伊勢さん」の地方展開と神仏習合について見てゆきます。

#### ケース5:生前の遺徳そのままに～天神さん～

天神さんは福井県嶺北地方では天神講で親しまれている神ですが、悲劇の人物・菅原道真が怨霊となった恐ろしい神の側面と、学問の神の側面を併せ持つ神として信仰されています。福井では江戸時代以前に遡る作品は意外に少ないですが、代表的なおすがたを絵画と彫像でご覧いただけます。



越前市二階堂町白山神社



#### ケース6:奈良の大勢力、越前へ～春日神社～

奈良県の春日大社は藤原氏の氏神として崇拝されていますが、興福寺と一体となり荘園を通じて全国展開しました。春日神社は、越前では中世以降、特に旧坂井郡で多く見られます。今回はそのうち三国町宿の春日神社蔵の3軀の神像(写真4)がお出ましです。春日大社を背景とした高い文化を感じていただきます。



(写真4) 坂井市指定文化財 女神坐像 坂井市三国町宿春日神社

#### 4. お道場～「お浄土」へといざなう仏教施設～

集落では鎮守の神社とともに、仏教施設、とりわけ浄土真宗寺院や道場の併存が多く見られます。今回、勝山市比島道場の本尊をはじめとした什物(写真5)により、浄土真宗特有の空間構成をご覧いただきながら老若男女すべての人(衆生)を救う真宗道場の意義を検討します。



勝山市比島 比島道場 外観



(写真5) 阿弥陀如来立像 勝山市比島 比島道場

#### おまけ 附. 神の番犬～獅子と狛犬～

神社で最も馴染み深い狛犬、獅子。神を守るすがたやお祭りでの先導、舞にも大活躍です。そんなナイスキャラを越前町八坂神社の木造狛犬を中心にちょっとだけ紹介します。

普段目にすることの少ない「神のおすがた」を通じて身近な神社への関心を深めていただくとともに、真宗王国を体現する真宗道場も併せて、集落の基盤を成す宗教文化の世界をお楽しみいただきたいと思います。

(河村健史)



(写真6) 木造狛犬 阿形 越前町天王八坂神社

特別展

ふくいの鎮守さま 一神と真宗道場が織りなす信仰世界一

開催期間: 令和元年 10月26日(土)～11月24日(日) 期間中無休

観覧料: 一般 400円(320)・70歳以上 200円(160)・大高生 300円(240)・中小生 200円(160) ( )は団体料金

## 福井県内の石材

[各法量] 縦10cm×横10cm×厚2cm(17点)

当館の常設展示には、福井の歴史や文化に関する資料を時代ごとに展示する「歴史ゾーン」と、特別展示室や「昭和のくらし」コーナーを含む「トピックゾーン」があります。いずれも展示替えがあり、「昭和のくらし」コーナーでは季節に合わせた資料や演出を変更し、「歴史ゾーン」は年に1回、1～3か所の展示コーナーを変更しています。

今回ご紹介するのは、平成31年(2019)の3月に「歴史ゾーン」の「笏谷石」コーナーに追加した展示資料です。「笏谷石」は、足羽山(福井市)で採掘されていた火山礫凝灰岩です。大量に採掘できて加工しやすく、古墳時代の石棺や石室に始まり、中世以降には供養塔や石仏、狛犬や鳥居といった信仰関係の品物のほか、鬼瓦や屋根の棟石、石垣、井戸枠、敷石や基礎石などの建材、石臼や囲炉裏枠、流しなどの生活用品まで、さまざまな品が作られて広く使われました。現在も福井県嶺北地方を中心に景観を彩っており、日本遺産にも指定されました(令和元年6月)。越前国外へも移出され、北海道から山陰地方に至る各地で製品を見ることができます。

とはいえ、福井県で用いられた石材は笏谷石だけではありません。この石材サンプルの展示では、笏谷石の種類(青手・中手・黒手・ごまんど石・くも)と、あわら市、福井市、鯖江市、越前市で採掘されていた12種類の石材を紹介しています(写真1)。なお、石材の名前は採掘地の地名に「石」をつけた通称です。

こうして並べてみると、それぞれの個性がよくわかります。たとえば、和田石(写真2)や、宮谷石・熊坂石のように見た目が笏谷石に近い凝灰岩もあれば、浜住石(写真3)や別所石のように肌理が粗く黄色がかった凝灰岩もあります。赤みの強い上野石(写真4)や半田石、白っぽい河端石や氷坂石など、色もとどりです。

これらの石材は、採掘地周辺でおもに建築材に使われたほか、特徴を活かしてさまざまな用途で利用されました。たとえば、笏谷石のなかでも礫(凝灰岩に混じる小さな石)が小さくて肌理が細かく、青色をした石材は「青手」と呼ばれ(写真5)、石仏や狛犬などの細かな彫刻が必要な製品の材料とされました。同じ笏谷石でも「ごまんど石」と呼ばれるものは(写真6)、肌理が粗く大きめの礫が混じっており丈夫であるため、福井城の石垣など建築材に用いられました。熱に強い浜住石や別所石は竈の材料に、小和清水石(写真7)は花崗砂岩で粒子が均一で硬いことから石臼に用いられてきました。なお、展示した以外にも、県内では浄教寺砥石(福井市)、日引石(高浜町)などの石材も知られています。

この石材サンプルは触わたることができます。ぜひ、じっくり見て、触れて、石の特徴を感じてください。そして、古い家屋や寺社、足元の敷石や石段、路傍の石仏や石殿など、みなさんの身近な場所に残されている石造物や石材に興味を持っていただければと思います。

(瓜生由起)



写真1: 石材サンプル展示

## 石材サンプル一覧(右上から)

- 1 段目: 笏谷石[青手]、笏谷石[中手]、笏谷石[黒手]、笏谷石[ごまんど石]、笏谷石[くも]
- 2 段目: 宮谷石、熊坂石(ともにあわら市)、別所石、浜住石、上野石(いずれも福井市)
- 3 段目: 小和清水石、半田石、別畑石(いずれも福井市)、河端石、和田石(ともに鯖江市)
- 4 段目: 戸谷石、氷坂石(ともに越前市)

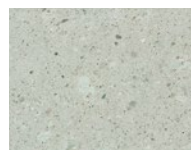


写真2: 和田石(鯖江市)

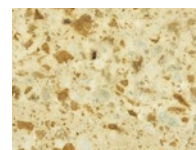


写真3: 浜住石(福井市)

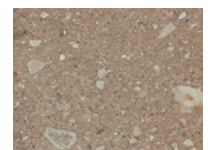


写真4: 上野石(福井市)



写真5: 笏谷石(青手)



写真6: 笏谷石(ごまんど)

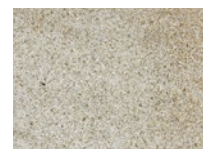


写真7: 小和清水石(福井市)



## 『福井縣の華』

〔法 量〕 22.5×30.0(cm)

〔時 代〕 明治42年（1909）

明治42年(1909)、皇太子(後の大正天皇)の福井行啓がありました。同年、この行啓を記念して、県内の名所などを写真で紹介した絵はがきや写真帖(帳)が発行・発刊されました。『行啓記念写真帖』、『福井県敦賀郡名所古跡写真帖』、『福井県写真帖』などが知られており、今回紹介する『福井縣の華』もそのひとつです。

『福井縣の華』は、県外および国外在住の福井県出身者と県内在住の人物を肖像写真とともに紹介した写真帳です。本書の凡例に、「互いに写真交換的に親しく、其容貌に接し、住所姓名肩書出生地を知りて、社会交際の機関に資し、自他の利益を得られんことを期す」とあり、顔写真付の名刺交換をするような趣旨の写真帳として作成されたものといえます。

発行人は今立郡南中山村野岡(現越前市)の実業家木戸正栄で、後に『福井県自治民政資料』(明治45年刊)や『南中山村誌』(昭和13年刊)などを発刊し、昭和10年代に東京神田で文成社という印刷所を開業した人物です。発行所は東京本郷にあった大成社商会、印刷所は博文館印刷所です。巻末に発行人や発行所名のほかに、「募集主幹 秦恭近」とあることから、県内外から本書への掲載希望者を募り、掲載料を徴収して発刊されたものと思われる。

肖像写真の掲載順は、福井県出身の県外在住者、福井市在住者、福井市以外の郡部在住者の姓名のイロハ順となっています。それぞれの肖像写真の上下に肩書や職業などを記し、下部に現住所と姓名が記され、県外在住者の場合は出身地も記されています。

本書に掲載されている人物は、計1,336余名で、県外在住者約269余名、県内在移住者1,067余名です。なお、余名というのは、本人だけでなく、夫人や父母、子もあわせて掲載された場合があるためです。

まず、県外在住者を見ると、北は北海道から南は福岡県まで1道2府17県に及びます。最も多いのが東京在住の205名で、次いで北海道18名、大阪9名と続きます。そのほか、国外在住者は6名です。

次に県内在住者の内訳をみると、福井市在住が209名と最も多く、次いで発行人の地元である今立郡在住が191名と続きます。詳細は以下のとおりです。

地域	人数	地域	人数
福井市	209	今立郡	191
坂井郡	184	南条郡	57
吉田郡	49	敦賀郡	42
足羽郡	42	三方郡	84
大野郡	21	遠敷郡	109
丹生郡	33	大飯郡	44

掲載されている人物の肩書や職業は実に多種多様です。なかでも比較的多いのは、県議会や郡町村議会議員、学校長、町村長や助役といった公職者です。また、医師、軍人、酒等の醸造業、農業なども多く、福井市在住者では生糸・羽二重織物などの繊維・織物業が多くみられます。さらに、女性も多く掲載されていますが、その大半は愛国婦人会会員の肩書となっています。

なお、当館では本書のほかに、『福井県写真帖』(明治42年刊)、『北海道樺太在住福井縣人写真帖』(大正3年刊)、『近畿在住福井縣人史』(大正10年刊)、『関東在住福井縣人史』(大正12年刊)、『県外在住福井縣人史』(大正14年刊)等、明治から大正期の福井県人の肖像写真を掲載した写真帳をもとに、人物のデータベース化を進めています。(山形裕之)



表紙



部分 県外在住者



部分 県内在住者

ちゅうやおび  
『昼夜帯』(1巻)

[法 量] 22.5×15.6(cm)

[時 代] 大正9年(1920)8月発行

越前萬歳について掲載している『昼夜帯』という雑誌を紹介します。

越前萬歳は、野大坪村(現 越前市味真野)、上大坪村(現 越前市上大坪)の人びとによって伝えられてきたもので、かつては「野大坪萬歳」とも呼ばれてきました。家々を訪れ、初春を言祝ぐ芸能で、太夫と才蔵の2人によって行るのが基本です。太夫は掛素袍と呼ばれる独特の衣装を身にまとい、才蔵は越前萬歳独特の摺太鼓を持ち、その二人の掛け合いでもって、祝いごとを述べます。江戸時代には福井、大野、勝山、鯖江などの各藩へ、また、加賀の大聖寺や金沢へも出かけ、それぞれの城内などでも萬歳を演じていました。

越前萬歳の記録が残るのは江戸時代以降のことです。

近代に入ると、明治時代の中頃から越前萬歳に関する資料が散見されます。とくに『越前国今立郡誌』(明治42年(1909)今立郡刊)に書かれた越前萬歳の由来は、越前萬歳研究の端緒となったものであり、民俗学の父とも呼ばれる柳田国男は、これをもとに「越前萬歳について」、「ふたたび越前萬歳について」を書きました。

このように越前萬歳の研究が始まった中で、大正時代に入ると『昼夜帯』という雑誌で紹介されます。『昼夜帯』は、昼夜帯刊行会という団体の会誌で、この会は風俗史研究者として名前を知られている江馬務が主幹を務めた団体です。『昼夜帯』は年3回刊行を企図したものの、残念ながら刊行は遅延し、2巻で終刊しています。

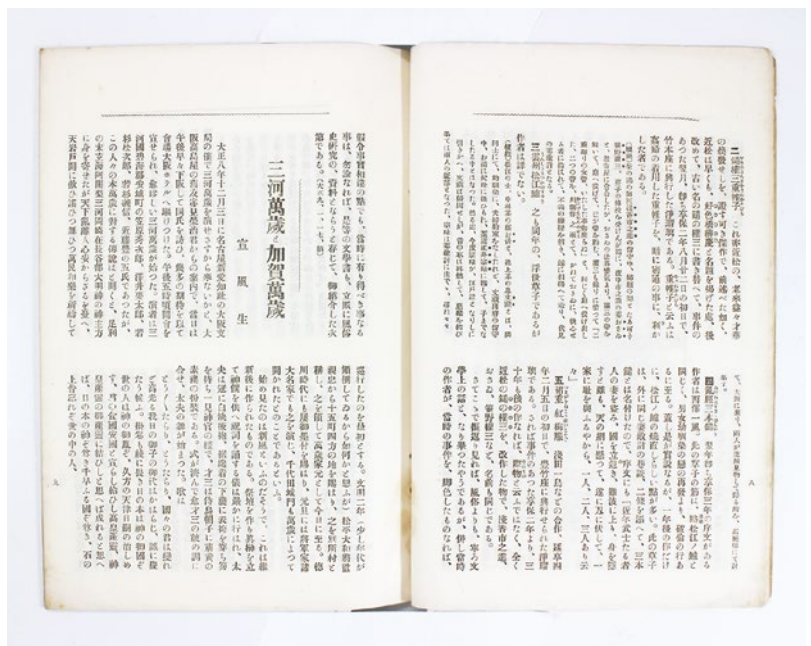
1巻は大正9年(1920)8月に発行されており、その1巻に宣風生なる人物によって「三河萬歳と加賀萬歳」という文章が書かれています。後に刊行された『越前萬歳考』(野大坪萬歳復興会編、昭和10年(1935))に寄せられた江馬の文章から、この宣風生というペンネームの人物は江馬だと考えられます。

さて、その「三河萬歳と加賀萬歳」では、三河萬歳と「加賀萬歳」が京都へ招かれていたのを江馬が見聞したことを書いています。この「加賀萬歳」の人々は、越前国丸岡(現 坂井市丸岡町)出身の画家山田介堂を通じて、今立郡味真野村(現 越前市)から招かれたと記されており、「加賀萬歳」は、実際には越前萬歳であることがわかります。しかし、江馬はこの文章を記した時点では越前萬歳があることを知らなかったのでしょうか、終始「加賀萬歳」として書いています。江馬は萬歳の由来についてのほか、どのような衣装か、どのような演目が上演されたか、ほかにどのような演目があるかなどを聞き取りしています。また、芸態(芸の様子)の面では言葉が早すぎて、聞き取れなかったが、「調は抑揚も多く変化もあり、実に面白く」、舞も細やかで良いものであり、観客に飽きを感じさせない技術も素晴らしいと記しています。

研究者が実際に見聞きした記録として、古いものの一つであり、当時の様子を知る貴重な手がかりの一つでもあります。(川波久志)



『昼夜帯』(1巻)表紙



宣風生「三河萬歳と加賀萬歳」



## 娘パズル

[法 量] 8.5×7.0(cm)

[時 代] 昭和15年(1940)頃

現在、インターネット上で「箱入り娘」と検索すると、無料のフラッシュゲームが出てきます。また、「箱入り娘」は実際のパズルゲームとして販売もされています。こうしたパズルゲームとしての「箱入り娘」が、かつてどのような目的で製作・発売されていたのかを考えるため「娘パズル」をご紹介します。

この資料は「娘パズル(解答付)」と書かれた黄色い箱に入っています(写真1)。箱の側面には、向かって右側に「素敵に面白いパズル」、向かって左側には「<sup>すこぶ</sup>頗る近代的なパズル」と書かれています。

蓋を開けると、「娘」と書かれた大きな駒がまず目につきます(写真2)。そして、その周りに「祖父」、「祖母」、「父親」、「母親」、「兄」、「姉」、「妹」、「先生」と書かれた駒もあります。文字がはがれた駒もありますが、このパズルの説明書によれば、もともとは「弟」と書かれていたようです。

箱の蓋をひっくり返してみると、このパズルの遊び方が書いてあります。どのような遊び方を次に示します。なお、引用文は適宜句読点やルビを補ったほか、旧字体は新字体に直してあります。また、以下の引用文中に登場する「上図」は、写真2にある並べ方と同じです。

始め上図の如く駒を配列し、空間を利用して上下左右に駒を動かして、下の出口迄「娘」さんを導いて下さい。

つまり、このパズルは家族や先生が書かれた駒を動かして、箱の下にある「出口」から「娘」を箱の外へと取り出すというゲームなのです。

では、「娘」を箱の外に出すというこの行為は何を意味しているのでしょうか。それは、先ほどの遊び方に関する記述の前に書いてある、このパズルに関する以下の説明から分かります。

新日本の現代娘は箱入娘の殻を脱棄てねばなりません。国民皆労一深窓の箱入娘から社会、大東亜の娘として颯爽堂々と乗出してこそ真の「日本娘」でせう。

然し何しろこの一足飛びの飛躍も難しいので、祖父母、父母の暖い庇護で、この社会進出を優しく導いてあげねばなりません。一家中揃って、学校時代の先生の御指導に、皆様の御智慧を拝借してこの「日本娘」の出発を歓迎し度いと思ひます。

すなわち、このパズルは、国民が全員で働くべきとされた社会状況のなかで、娘も家庭から飛び出して働かなければならないという考え方を、遊ぶ人たちに広めようとしたものだと言えます。

「大東亜」や「新体制」という言葉から、このパズルが発売されたのは、昭和15年(1940)頃であったと推測されます。この頃には、日中戦争の長期化にともなって、女性も労働力として期待されるようになりました。この資料もこうした時代背景の下で発売されたのだと考えられます。

もちろん、現代の商品やフラッシュゲームはこうした目的ではなく、パズルとして楽しむために販売・公開されています。戦時下の女性のあゆみにも思いをめぐらしつつ、これらのパズルを体験してみたいかでしょうか。(橋本紘希)



写真1 「娘パズル」の箱



写真2 「娘パズル」の駒

5月

- 9日(木)  
福井県立子ども歴史文化館(資料調査)
- 11日(土)  
企画展「昭和・平成 ふくい観光史」展示説明会
- 13日(月)  
福井大学語学センター来館(オープン収蔵庫)
- 18日(土)  
ふくい歴博講座「平成福井の観光史」(研修室)
- 19日(日)  
企画展「昭和・平成 ふくい観光史」展示説明会

6月

- 8日(土)～9月1日(日)  
写真展「カラー写真が伝える震災前後の福井」  
(エントランスギャラリー)
- 9日(月)  
亀岡市文化資料館(資料調査)
- 19日(水)  
福井県交流文化部文化課(資料調査)
- 28日(金)  
福井県立子ども歴史文化館(資料借用)

7月

- 4日(木)  
熊本県立美術館(資料調査)
- 20日(土)～9月1日(日)  
特別展「家事・家電・家庭のうつりかわりー「主婦」の近代ー」  
(特別展示室)
- 21日(日)  
特別展「家事・家電・家庭のうつりかわりー「主婦」の近代ー」  
展示説明会
- 27日(土)  
ふくい歴博講座「家電と家事」(研修室)
- 28日(日)  
特別展「家事・家電・家庭のうつりかわりー「主婦」の近代ー」  
展示説明会

8月

- 2日(金)  
橘曙覧記念文学館(資料調査)
- 3日(土)  
特別展「家事・家電・家庭のうつりかわりー「主婦」の近代ー」  
ミニ講座
- 4日(日)  
キッズミュージアム「昭和の夏あそび」  
特別展「家事・家電・家庭のうつりかわりー「主婦」の近代ー」  
展示説明会
- 11日(日)  
特別展「家事・家電・家庭のうつりかわりー「主婦」の近代ー」  
展示説明会
- 21日(水)  
橘曙覧記念文学館(資料貸出)
- 22日(木)～27日(火)  
博物館実習
- 25日(日)  
キッズミュージアム「昭和の夏あそび」
- 27日(火)  
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館(資料返却)



ふくい歴博講座「家事と家電」(7月27日)



特別展「家事・家電・家庭のうつりかわりー「主婦」の近代ー」展示説明会(8月4日)